

## はじめに

龍は、十二支の中で唯一、想像上の生きものであると言われています。

にもかかわらず、日本では驚くほど多種多様な龍の目撃談が報告されており、

龍の存在を否定するには、かなりの勇気を要するほどです。

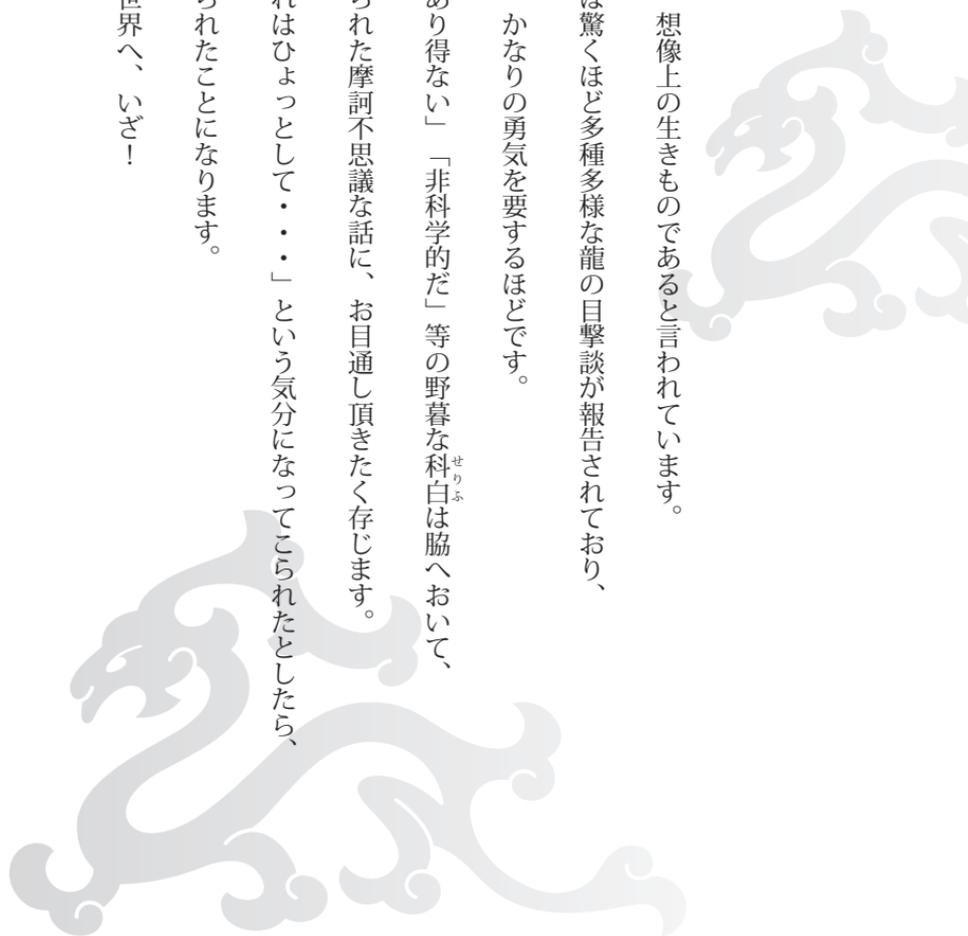
この際、「そんなこと、あり得ない」「非科学的だ」等の野暮な科<sup>せり</sup>白<sup>ふ</sup>は脇へおいて、

とりあえず、本書に収められた摩訶不思議な話に、お目通し頂きたく存じます。

読み進めるうちに、「これはひよつとして・・・」という気分になってこられたとしたら、

本書の目的の大半は達せられたこととなります。

ではでは、神秘的な龍の世界へ、いざ！





第一章..見えたぞ、  
見えたぞ、  
見えたぞ！





1

# 老僧の正体

（『宮川舎漫筆』 卷之五）

寛政年間のこと。

ある時、小日向大曲（こひなたのおおまがり）（東京都文京区小日向）にひとりの老僧が現れ、家々を廻つては、

「念のために申し上げますが、近日中に、この近辺を激しい風雨が襲い、龍が昇天するものと思われまふ。その折には外出を避け、お子様方がみだりに屋敷の外へ出ぬよう、お気をつけなさるが宜しかろう」

と言いふれて歩きました。

旗本の土橋某は、この口上を聞いて老僧を呼び止め、座敷に通して、面談しました。

土橋が、

「ご親切にお知らせ頂き、かたじけのうございます。ところで、龍の昇天の件は、どなたからお聞きになられましたか？」

と訊ねますと、老僧は、

「誰から聞いたも何も、この件は拙僧が年来、見聞していることでございます。最近のように晴天が続きました後には、急に風雨が激しくなつて龍が昇天するということが、まま起こるもので



第二章..

雨のことなら、

おまかせ！





40

## さすがは安倍晴明あべのせいめい （『御堂関白記』）

寛弘元（一〇〇四）年七月十四日は、一日中、曇天で、ときおり小雨がぱらつきました。夜に入つて、大雨となりました。

右頭中将うだうのちゆうじやう（藤原実成さねなりのこと）によると、帝は、

「安倍晴明あべのせいめい（平安朝の高名な陰陽師おんみまうじ）が五龍祭ごりゆうのまつり（陰陽道の降雨祈願祭）を執りおこなつたところ、さつそくに天が感応し、雨が降つた。よつて、褒美さぬかみの衣被かぎを授けよう」と、おっしゃつておられるそうです。

私も、早く下賜してやるのがよかろうと思います。

ちなみに、今宵は雨は降つたものの、雷鳴はそれほどでもありませんでした。

第三章 ..  
龍宮へ、ようこそ！





55

龍宮と言えばこの男  
(童謡『浦島太郎』)

一、  
むかしむかし 浦島は

助けた亀に 連れられて

龍宮城へ 来てみれば

絵にも描けない 美しさ

二、  
乙姫おとひめさまの ご馳走に

鯛やひらめの 舞まいおどり

ただ珍しく おもしろく

月日のたつのも 夢のうち

三、  
遊あそびにあきて 気がついて

お暇いとまごいも そこそこに



第四章 .. 決戦だ！





67

## 龍と戦う海女（香川県の伝説）

奈良に都があつたころのおはなし。

藤原家の御曹司おんざうしの不比等ふひとには、たいそう美しい妹君いもうとぎみがおられました。

その評判は遠く唐土もろこしの高宗皇帝こうそうの耳にまで達し、やがて妹君は后きさきとしてかの地へ迎えられました。

ある年、日本を懐かしんだ妹君は、兄の不比等へ面向不背めんこうふはいの珠たまを贈りました。

この珠は、内におはす釈迦三尊しやくかさんそんが上下左右どこから拝してもこちらを向いて佇たたくんでおられるように見える、という名宝なほうです。

面向不背めんこうふはいの珠を載せた船は、波荒なわらき外海そとうみを無事に渡りきって日本へたどり着き、讃岐国の志度浦しどのうらの沖へさしかかりました。

ここまで来れば、都まではあと一息です。随行してきた使者しやくしやくの一行も、上陸の日を指折り数えて、待ちわびていました。

ところが・・・。

それまで青く澄んでいた空がにわかにかき曇り、雷鳴がとどろいたかと思うと、すまさじい風雨



第五章..

龍にだって事情がある！





80

## 親心は龍も同じ（『今昔物語集』巻三第九）

多くの龍は、大海の底を住処すみかとしています。

ある時、一匹の龍が海底で子を産みました。

すると、天敵である金翅鳥こんじちよう（火炎を吐き、龍を喰らう伝説上の鳥）が飛来して、巨大な翼で大海を煽あおぎ、海水を干し上げて、底にいる龍の子を喰らおうとしました。

龍は嘆なげき悲しみ、仏へ訴え出しました。

「私たちは、子を為すたびに金翅鳥の脅威にさらされます。この災難から逃れる術すくはないものでしょうか。」

すると、仏は、

「僧侶の袈裟けさの端はしを切り取り、それを生まれた子にかぶせておきなさい」

と答えました。

そこで、早速、龍は言われた通りにしてみました。

しばらくしますと、またしても金翅鳥がやって来て、いつものように翼で煽いで海水を干し上げましたが、龍の子を見つげ出すことができず、むなしく引き揚げて行きました。